

「現代社会と野生生物の保護問題」

渡邊邦夫

(ニホンザル野外観察施設・社会生態分科)

1) 問題の背景

世界的な人口の増加
経済のグローバリゼーションと南北問題
拡大する格差と不安定な社会

2) 世界の霊長類の現状

ほとんど絶滅(Critically Endangered)とは (IUCNによる基準)
10年または3世代の減少率が80%以上
分布域が100km²未満、または生息地が10km²未満
成熟個体が250未満(連続的に減少している:3年もしくは1世代間に20%)
成熟個体が50未満
10年または3世代後の絶滅確率50%以上

絶滅寸前(Endangered)
10年または3世代の減少率が50%以上
分布域が500km²未満、または生息地が500km²未満
成熟個体が2500未満(連続的に減少している:5年もしくは2世代で20%)
成熟個体が250未満
10年または3世代後の絶滅確率20%以上

アジアのサルの約3分の1が絶滅危惧種である

3) 種絶滅への要因

過剰な殺戮
生息地の破壊と分断
帰化動物の衝撃
絶滅への連鎖(捕食者や寄生、病原菌等) 「悪魔の四重奏」(Diamond, 1989)
決定論的要因と確率論的な絶滅要因
環境変動や火山噴火等のカタストロフィによって小集団になればなるほど絶滅への可能性が高くなる
重要なことは一定数以上の個体群を確保すること
最小持続可能個体数(MVP)
集団存続可能性分析(PVA)
保護区の設定:モニタリングと適切な管理
飼育下繁殖と再導入
事例的に:インドネシアではどうか?

4) 自然保護文化発展の条件

経済発展にともない引き起こされた自然や環境の破壊
富の蓄積によるゆとり
大きな戦乱の回避
政治的自由と公正、それに基づく社会の安定
比較的自由的な文化的学問的な活動
発展途上国との間での摩擦

5) 近年の野生ニホンザルの分布拡大とその保護管理問題

ニホンザル分布の時代変遷(拡大する分布域)
ニホンザルの分布は第2次世界大戦頃まで減少の一途をたどった
大戦後は次第に分布を拡げてきている

急速に増加する有害鳥獣駆除による野生ニホンザルの捕獲

日本社会で何が起っていたのか？

ニホンザルにとっての生息地破壊: しかしいつもそれが原因だったわけではない

捕食者

地方における労働力の変化

森林生産の変化

動物愛護思想の普及

人を恐れないサルの増加

ニホンザル群の人里へ向かっての移動

6) どのようにニホンザルを保全すべきなのか

実際のニホンザルの分布はいくつかの地域個体群から成り立っている
実際の保護管理策はそれぞれの地域個体群毎に行われるべきである
保護管理上の基本単位となる地域個体群をどう規定するのが最重要の問題

個体群の管理に必要な要素

明確な「操作的目標」

対象種(ニホンザル)に関する正確な知識

複雑さ、相互の関連、動的な変動の理解

「不確定性」と「非正常性」

順応的管理(Adaptive Management)

説明責任(Accountability)

問題は？

最小限残されるべき“最小持続可能個体数”をどの程度に設定すべきか？

どのような保全策を主要な方策と考えるのか？ 生息地の保全・回復、被害対策の充実、捕獲を含む個体数の調節、等保全策の効果判定が必要